

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 25 日現在

機関番号：33921

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2011

課題番号：20520122

研究課題名（和文）ドイツ軍俘虜収容所における音楽活動の横断的・総合的研究
—音楽活動記録の作成研究課題名（英文）A Transversal and Synthetic Study on Music Activity in
Historical Data “A Prisoner-of War Camp of German Force in Japan”

研究代表者

岩井正浩（Iwai Masahiro）

愛知淑徳大学・大学院教育学研究科・教授

研究者番号：80036392

研究成果の概要（和文）：第一次世界大戦で日本に敗れ中国青島から日本各地 6ヶ所へ収容されたドイツ兵俘虜たちは、文化活動の一環として積極的に音楽活動を展開した。そこでは上海工部局交響楽団などで活躍していた音楽家が中心となって交響曲から声楽の小作品まで数多くの音楽を演奏し、その一部は市民に提供され、さらにはレッスンまで行われた。活動を横断的・総合的に研究した結果、ベートーヴェン《交響曲第9番》のみならず、各収容所独自の作品、日本ではほとんど知名度のない作曲家の存在が明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：German prisoners of war at the Battle of Tsingtao during World War I, defeated by the allied forces of Japan, were detained in six concentration camps in Japan. In each camp, those captive officers and soldiers positively performed music, led by active musicians in the Shanghai Municipal Orchestra. They had a large repertoire of music works from symphonies to opuscular songs. One part of their activities was performing music for Japanese citizens, furthermore the other providing them with musical lessons. A transversal and synthetic study on their musical activities, we clarified in each camp, characteristic music works of composers whose names are hardly known in Japan, in addition to well-known Beethoven's No.9 Symphony.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	700,000	210,000	910,000
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
2011年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：ドイツ軍俘虜の音楽活動

科研費の分科・細目：芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：ドイツ軍俘虜、鳴門市ドイツ館、板東俘虜収容所、久留米俘虜収容所、習志野俘虜収容所、青野原俘虜収容所、西洋音楽移入、ディ・バラック

1. 研究開始当初の背景

(1) ドイツ兵俘虜に関する研究は各方面で行われてきた。ただ音楽からのアプローチは一部を除いて進展していない。さらに各収容所における音楽活動の横断的・総合的研究は皆

無である。

(2) 日本への洋楽移入は、16世紀のキリスト教以来一部地域を除いて空白状態が続いていた。明治期になって本格的に音楽取調掛、東京音楽学校、宮内省雅楽課、軍楽隊などが

ら移入され、学校教育でも実施されてきた。ただ、これらはすべて上からの受容であり、民衆レベル（ドイツと日本など）による文化接触・交流はなかった。

(3) 20世紀初頭のドイツ兵による日本各地の小都市における音楽活動は、彼らの主体的な活動であった。日本人は塹越しに、さらには直接的に西洋音楽を享受するだけでなく、レッスンを受け、彼らの帰国に際しては楽器の提供も受けている。

(4) 彼らが印刷したドイツ語新聞、手書きのコンサートプログラムは、鳴門市ドイツ館、久留米市教育委員会、習志野市教育委員会をはじめとする各地の公共団体がさまざまな方法で蒐集し、データとしては蓄積を重ねてきていた。ただ、印刷された新聞も20世紀初頭のドイツ語であること、また青野原のようにコピー状態の悪い手書きしか存在していないプログラムもあること、さらには似ノ島のようにまったく音楽プログラムが現存していない収容所もあることなど、今後の課題も残されている。

2. 研究の目的

(1) 四国3地区(徳島、丸亀、松山)、整理統合された久留米、似ノ島、青野原、板東、名古屋そして習志野の各収容所におけるドイツ語新聞、手書きプログラムを蒐集する。

(2) プログラムから作曲家別、演奏ジャンル別、演奏曲目別に分類し、各収容所の音楽活動を横断的・総合的に研究することでドイツ兵による音楽活動の独自性・共通性を研究する。

(3) 以上から日本におけるもう一つの西洋音楽受容としての20世紀初頭ドイツ兵たちによる音楽活動の特徴を明らかにする。

3. 研究の方法

(1) ドイツ語新聞が発行された徳島、松山、丸亀、板東のドイツ語新聞から演奏記録および音楽に関する記事を抽出することで音楽活動の実態を把握する。

(2) 青野原における手書きプログラムコピーを和訳し分析する。

(3) 各収容所の音楽活動は、習志野『特別展示：ドイツ捕虜オーケストラの演奏した曲』、久留米『ドイツ軍兵士と久留米Ⅱ』、板東「Die Barake Band I—IV」、徳島「Tokushima Anzeiger」、松山・丸亀「Das Engel-Orchester 1914-1919」を基礎資料とする。

(4) これらのデータから曲家別、演奏ジャンル別、演奏曲目別に比較研究する方法で、音楽活動を横断的・総合的に解明する。

(5) ドイツ語記載の作曲家、演奏曲目は『Baker's Biographical Dictionary of Musicians』、『Die Musik in Geschichte und Gegenwart』、『The New Grove Dictionary of

Music and Musicians』、『ニューグローブ音楽大事典日本語版』、『平凡社音楽大事典』を基本的に使用する。

(6) 俘虜名簿に関しては、瀬戸武彦氏の「青島(チンタオ)をめぐるドイツと日本(1)、(2)」に依拠する。

4. 研究成果

全国6カ所に統合された俘虜収容所での音楽活動は、その実態が収容所内で発行された新聞に見ることができる。ただ、広島県似ノ島に関しては資料が残っていない。また名古屋も写真資料は現存しているがプログラム等の資料は乏しい。一方、千葉県習志野、福岡県久留米、徳島県板東に関しては関係者の努力で実態が明らかとなってきた。そして兵庫県青野原も最近になって新たなプログラムが入手できてきた。ここでは習志野、久留米、板東、青野原、そして板東に統合される以前の愛媛県松山、香川県丸亀、徳島県徳島の収容所の新聞から得られた資料からも明らかにする。

四国3地区(徳島、丸亀、松山)および板東に関しては、研究期間中に中間成果として、「四国3収容所におけるドイツ軍俘虜の音楽活動(2010年)」、「歴史資料：板東俘虜収容所関係資料にみるドイツ軍俘虜の音楽活動」(2010年)を公表した。本研究はこの2つの研究に加えて次のような構成で論考を行った。

(1) 各収容所における指導的音楽家とコンサート記録

(2) 各収容所の横断的・総合的音楽活動(ジャンル・作曲家・演奏曲目)

(1) 各収容所における指導的音楽家とコンサート記録

① 習志野：指導的音楽家はハンス・ミリエスで、ベルリンでヴァイオリンをヨゼフ・ヨアヒムに学び、上海共同租界オーケストラのコンサートマスター兼副指揮者努めた。青島では海軍膠州派遣砲兵大隊第5中隊・後備2等軍楽手。習志野では「ミリエス楽団」を結成し、自らもベートーヴェン《ヴァイオリン協奏曲》を演奏している。コンサートポスターを展示した『特別展示：ドイツ捕虜オーケストラの演奏した曲』によると、1915年12月25日の「大正4年クリスマスコンサート」を皮切りに1919年11月28日の「第12回コンサート」までの19回記録がある。さらにポスター以外にも第8回室内楽演奏会など9回(朗読、演劇における演奏を含む)記録がある。コンサートとしては、「ハンス・ミリエスお別れコンサート」、「宗教改革400年記念の夕べ」、「アルフォンス・ヴェルダール謝恩コンサート」、「ミリエス演奏会」、「合唱協会リートの夕べ」、「男声合唱民謡の夕べ」、「芸術家コ

ンサート」、「室内演奏会」、「スペイン風邪犠牲者慰霊祭」、「クリスマスコンサート」、「ハンス・マルフケ謝恩の夕べ」などが催されている。

②久留米：指導的音楽家はオットー・レーマンで、ドレスデン王立音楽院でヴァイオリン、指揮法、室内楽、合唱法を学ぶ。その後海軍歩兵隊に入隊し青島へ赴き軍楽隊でヴァイオリンを担当し独奏も行っている。久留米に抑留されると「久留米収容所楽団」を結成し活発な音楽活動を展開する。『ドイツ軍兵士と久留米Ⅱ』によると、レーマンの指揮によるコンサートは、1915年6月13日の「プロムナードコンサート」を皮切りに1919年末までに優に150回を超えている。わずか4年6カ月の間に開催されたコンサートの多さは驚嘆に値する。コンサートとしては、「プロムナードコンサート」、「将校食堂コンサート」、「演奏シリーズ」、「フランツ・ヨーゼフ皇帝陛下御生誕85歳コンサート」、「室内楽の夕べ」、「歌曲の夕べ」、「愉快的夕べ」、「収容所楽団コンサート」、「クリスマスコンサート」、「ヴァーグナーの夕べ」、「謝肉祭コンサート」、「オーケストラコンサート」、「復活祭コンサート」、「精霊降臨祭コンサート」、「レーマン楽団コンサート」、「聖金曜日コンサート」など数多い名称で開催されている。

③徳島：徳島収容所で指導的役割を果たしたヘルマン・R.ハンゼンは1886年生れ。港湾都市シュテンティンで音楽教育を受け、1904年に海軍入隊。海軍膠州派遣砲兵大隊第3中隊軍楽隊長・軍楽曹長で、徳島収容所では「徳島オーケストラ」を結成、徳島収容所新聞『Tokushima Anzeiger』には50回にわたる演奏記録が掲載されている。後日、板東でベートーヴェン《交響曲第9番》を指揮したのはハンゼンであり、彼は自らも独奏者としてベートーヴェン《ヴァイオリン協奏曲》を演奏している。コンサートは、単に「演奏会」と名付けられるものが多いが、「精霊降臨祭コンサート」、「クリスマスコンサート」、「シンフォニーコンサート」などの名称もある。

④松山：松山ではマックス・ガーライスが中心的役割を果たしている。ガーライスは海軍歩兵第3大隊第6中隊の2等歩兵で、上海居留地工部局音楽隊員であった。松山では1916年1月27日から61回、収容所新聞『Das Lagerfeuer』が発行されている。『Das Engel-Orchester Seine Entstehung und Entwicklung 1914 - 1919』には、「シランメル楽団」による1916年10月22日の「庭園コンサート」を皮切りに第1回から6回までが明らかになっている。コンサートの名称は、「庭園コンサート」、「音楽の夕べ」、「娯

楽の夕べ」などである。

⑤丸亀：丸亀で中心的役割を果たした音楽家はパウル・エンゲルである。海軍歩兵第3大隊第7中隊2等歩兵で、上海居留地工部局音楽隊員であり、ヴァイオリニストでもあった。1915年1月10日には「第1回寺院楽団演奏会」を開催し、その後「丸亀保養楽団」を結成し精力的な音楽活動を展開する。この時すでにベートーヴェンの《ヴァイオリン協奏曲》を演奏している。コンサートについては収容所新聞『Das Marugame Tageblatt』に演奏会評ととも総計25回のコンサート記録が残されている。(③～⑤に関しては「四国3収容所におけるドイツ軍俘虜の音楽活動」『音の万華鏡 音楽学論叢』岩田書院2010年所収)コンサートは、「寺院楽団演奏会」、「丸亀保養楽団演奏会」、「ポピュラー音楽の夕べ」、「声楽演奏会」、「復活祭演奏会」、「精霊降臨祭演奏会」、「フランツ・ヨーゼフ皇帝生誕記念演奏会」、「交響曲演奏会」、「ヴィルヘルム皇帝生誕記念演奏会」、「音楽の夕べ」などの名称で開催されている。

⑥板東：板東では、四国3地区(徳島、丸亀、松山)から統合された中心的音楽家が、それぞれ独自の音楽活動を展開している。徳島からはヘンマン・R.ハンゼン、丸亀からはパウル・エンゲル、そして松山からはマックス・ガーライス達である。コンサート記録は統合し開設された板東俘虜収容所で、1917年9月から1919年3月まで発行された新聞『Die Barache』に掲載され、コンサートプログラム数は16種102点に及んでいる。(『歴史資料「板東俘虜収容所関係資料」にみるドイツ軍俘虜の音楽活動』(愛知淑徳大学論集 教育学研究科篇 2011年所収)。

ハンゼンによる「徳島オーケストラ」は15回、その後「M. A. K. オーケストラ」と改称し35回コンサートを開催している。そして1917年4月17日から2年8カ月後の1919年12月7日の「さよならコンサート」で活動を終えている。1918年6月1日に日本初演されたベートーヴェン《交響曲第9番》の全曲演奏もハンゼン指揮の徳島オーケストラであった。エンゲル率いる「エンゲル・オーケストラ」は1917年5月13日の第1回コンサートから1919年10月20日の第18回コンサートまで2年5カ月で18回「M. A. K. オーケストラ」と合同コンサートを2回開催している。演奏団体は他に「マンドリン楽団」(2回)、「シュルツ・オーケストラ(吹奏楽)」(3回)、「III SB 吹奏楽団」(6回)、「室内楽の夕べ」(8回)、「III SB 第六中隊による軍楽隊儀礼演奏」、「モルトレヒト男声合唱団」(2回)、「ヤンセン合唱団」、「朗読と音楽の夕べ」、「和洋音楽会」などがあり、約1,000名の俘虜収容所で

これほど数多くの音楽活動を展開したことも想像の域を超えている。さらに音楽関連活動としては演奏会評、講演も数多い。

他にも「軍楽隊儀礼演奏」、「歌曲コンサート」、「シラー生誕記念日によせて」、「モルトレヒト・マンドリン演奏会」、「III SB 吹奏楽団演奏会」、「歌のタベ」、「ウィーンアンサンブル演奏会」、「慈善演奏会」、「和洋音楽会」、さらには演劇における音楽演奏も行われている。

⑦青野原：青野原におけるコンサート記録は、今日まで 4 例しか確認されていなかったが、本研究の過程でさらに 10 例が確認された。ただ手書きのコピーであるため確認作業は困難を極めている。コンサートの年月日が不詳であるプログラムもあり、今後の研究に委ねられる。音楽家の特定はし難いが、演奏団体としては「収容所合唱団」が数多くのコンサートを行っている。特徴的なのはツィターの演奏や伴奏が存在していたし、ツィター用に編曲された楽譜も残されている。演奏会の名称は単なる「プログラム」の他に、「チャリティコンサート」、「歌曲のタベ」、「愉快的タベのひとつとき」、「クラシックのタベ」、「盛りだくさんのタベ」、「別れのタベ」、「最後になります！」の名称が付けられていた。

(2) 各収容所の横断的・総合的音楽活動（ジャンル・作曲家・演奏曲目）

各収容所で演奏されたジャンルは、交響曲、管弦楽曲 A（行進曲・序曲・組曲・バレエ曲）、同・B（ワルツ）、同・C（交響詩）、室内楽曲 A（独奏曲）、同・B（アンサンブル）、声楽曲 A（合唱曲）、同・B（歌曲・アリア）、同・C（演奏会式オペラ、民謡）に分けて分類を行った。

①習志野：総計 83 名の作曲家の作品を演奏した習志野は、交響曲 3、協奏曲 3、管弦楽曲 A=99、同・B=14、室内楽曲 A=2、同・B=11、声楽曲 A=30、同・B=23、同・C=15 となっている。主要作品はベートーヴェン＝交響曲第 5 番、ヴァイオリン協奏曲、ハイドン＝軍楽交響曲、メンデルスゾーン＝ヴァイオリン協奏曲、モーツアルト＝ヴァイオリンとヴィオラのための協奏交響曲、ショランダー＝春の交響曲などである。

②久留米：総計 244 名の作曲家の作品を演奏した久留米では、交響曲 31、協奏曲 15、管弦楽曲 A=913、同・B=126、同・C=3、室内楽曲 A=32、同・B=50、声楽曲 A=103、同・B=84、同・C=8 となっている。数多くの作曲家作品が演奏されているが、中でもベートーヴェンの交響曲 1, 5, 6, 8 番は日本初演である。メンデルスゾーン＝ヴァイオリン協奏曲、交響曲第 3 番、ヴァーグナー＝歌劇・

楽劇の前奏曲・序曲・序奏・合唱、ベートーヴェン＝ピアノ協奏曲第 5 番、ヴァイオリン協奏曲、交響曲第 1・5・6・7・8・9 番（第 1・3・2 楽章）、シューベルト＝未完成交響曲、ハイドン＝交響曲第 1・2・11・100・101 番、ヘンデル＝合奏協奏曲、モーツアルト＝交響曲 39・40・41 番、ベリオ＝ヴァイオリン協奏曲、ブルックナー＝交響曲第 7 番、リスト＝交響詩「レ・プレリュード」、ブルッフ＝ヴァイオリン協奏曲、ブラームス＝交響曲第 3 番など膨大な曲目数である。特徴的なことはヴァーグナー作品の楽劇・歌劇の管弦楽曲が多いということである。

③徳島：総計 99 名の作曲家の作品を演奏した徳島では、交響曲 3、協奏曲 3、管弦楽曲 A=111、同・B=21、室内楽曲 A=13、同・B=8、声楽曲 A=11、同・B=31 である。チャイコフスキー＝ヴァイオリン協奏曲、ハイドン＝交響曲第 1・6 番、ベートーヴェン＝ヴァイオリン協奏曲、交響曲第 9 番より「歓喜に寄す」、ヴァーグナー＝歌劇・楽劇の前奏曲・序曲・序奏・合唱などである。中でも序曲が多いのが特徴である。

④松山：総計 60 名の作曲家作品を演奏した松山では、交響曲 1、管弦楽曲 A=20、同・B=2、室内楽曲 A=28、同・B=9、声楽曲 B=9 などのジャンル分けとなっている。交響曲や協奏曲といった編成の大きな作品は演奏されてはいないが、シューベルト＝交響曲第 8 番をヴァイオリンとピアノで演奏している。他にはメンデルスゾーン＝ヴァイオリンソナタ第 4 番、ショパン＝イ長調ポロネーズ、ワルツ嬰へ長調、グリーグ＝ペールギュント組曲、ブラームス＝ハンガリー舞曲第 6 番、ベートーヴェン＝ヴァイオリンソナタ第 6 番、ヴァーグナー＝オペラ・アリアなど室内楽で、声楽が主たる曲目となっている。

⑤丸亀：総計 156 名の作曲家作品を演奏した丸亀では、交響曲 2、協奏曲 6、管弦楽曲 A=120、同・B=24、室内楽曲 A=52、同・B=11、声楽曲 A=11、同・B=33、同・C=3 のジャンルを演奏している。ベートーヴェン＝ヴァイオリン協奏曲、ピアノ協奏曲第 2 番、メンデルスゾーン＝ヴァイオリン協奏曲、ハイドン＝交響曲第 1 番、シューベルト＝未完成交響曲、ハ長調交響曲をヴァイオリンとピアノで、ロド＝ヴァイオリン協奏曲などである。

⑥板東：総計 147 名の作曲家作品を演奏した板東では、交響曲 10、協奏曲 5、管弦楽曲 A=286、同・B=46、同・C=5、室内楽曲 A=31、同・B=12、声楽曲 A=70、同・B=10、同・C=4、そして日本が 10 である。

以上、日本で知名度の高い作曲家作品のみならず、俘虜たちの身近の作曲家作品も数多く演奏されたこと、各収容所での独自性があること、そして音楽活動が彼らの生活の一部として機能していたことが明らかとなった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ① 岩井正浩 歴史資料『板東俘虜収容所関係資料』にみる音楽活動、愛知淑徳大学論集－教育学研究科篇、査読無、創刊号、2011、1－16
<http://hdl.handle.net/10638/1166>
- ② 岩井正浩、四国3収容所におけるドイツ軍俘虜の音楽活動、音の万華鏡、査読有、2010、7－35

[学会発表] (計2件)

- ① 岩井正浩 ドイツ軍俘虜と神戸、神戸シニアモダニティ研究会、2011.10.19、神戸BBプラザ
- ② 岩井正浩、四国3収容所におけるドイツ軍俘虜の音楽活動、東洋音楽学会、2009.10.18、沖縄県立芸術大学

[図書] (計1件)

- ① 藤井知昭・岩井正浩編、岩田書院、音の万華鏡、2010、465

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岩井 正浩 (IWAI MASAHIRO)
愛知淑徳大学・大学院教育学研究科・教授
研究者番号：80036392

(2) 研究分担者

小高 直樹 (ODAKA NAOKI)
神戸大学・大学院人間発達環境学研究科・教授
研究者番号：30204217

川内 由子 (KAWAUCHI YUKO)
四国大学・短期大学部・准教授
研究者番号：20224727